

	1	2
発表者	貞松杏果(サダメツアミ)	濱中詩乃 (ハマナカシノ)
所属	船橋市立リハビリテーション病院	順天堂大学医学部附属浦安病院
タイトル	外来リハビリにて3食経口摂取開始に至った一例	嚥下相が著名なギラン・バレー症候群 (GBS) 亜型疑いの症例が一般常食摂取可能になるまでの臨床経過
概要	食道癌切除後、両側反回神経麻痺、嚥下障害を認め、小腸瘻からの栄養投与を行っていた一例。元々当院回復期に入院相談が来ていたが、嚥下機能以外に著明な低下はなく、自立度も高かつたため、入院対応とならず、外来でのリハビリを開始した。初回受診時、嚥下反射惹起は認めるが、唾液処理より不十分な状態であった。嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査を実施しながらリハビリ時間内での経口摂取を開始するが、外来リハビリでは直接嚥下訓練、間接嚥下訓練両方を実施していたため、時間内での摂取量は制限があった。そのため、早期に自宅での摂取開始を進めていく必要があり、家族の嚥下機能への理解が必要不可欠であったため、リハビリ毎に嚥下状況や設定についての共有を行った。それにより、誤嚥性肺炎を起こした際も家族の判断が的確であり、早い段階で受診に至りいずれも軽度で経過。抗がん剤治療との並行でもあったため、体調不良や食欲低下を認めながらも3食経口摂取まで	本症例は、眼球運動障害や運動失調を欠く非典型的ギラン・バレー症候群 (GBS) 亜型疑いの80代男性で、GQ1bIgG抗体陽性と著明な嚥下障害を呈した。IVIG治療と並行して嚥下リハビリを実施し、舌圧や喉頭・舌骨運動の改善、代償手段（交互・複数回嚥下）の習得により、VF所見と嚥下機能が向上。FOISは欠食レベルから一般常食まで改善した。特に、シャキア訓練の継続により食道入口部開大が促され、咽頭期機能に好影響を与えた。非典型的GBSにおいてリハビリ介入を実施し、その臨床経過を報告するものである。

3	4
高橋朗子（タカハシアキコ） 第2北総病院附属小児リハビリテーション事業所かざぐるま	土佐林 有紀（トサバヤシユキ） 東京湾岸リハビリテーション病院
言語発達遅滞のある幼児一例に対するひらがなを活用した言語訓練	右半側空間無視を呈した患者に対し抹消課題と車椅子自走による病棟探索課題を行った例
表出性言語発達障害のある幼児1名に対するひらがなを活用した言語訓練について考察した。言葉の遅れを主訴に3歳3ヶ月でST介入となり、指導開始当初から[a:]の発声とともに叙述の指さしがみられた。形の弁別や数字の理解、身ぶり模倣など視覚的記号の理解は良好であったため、ひらがなで語を構成する言語指導を開始した。訓練直後は受信面がS-S法段階4-2：3語連鎖、発信面は母音が中心であった。自身の名前のひらがな文字や文字単語のマッチングを行い、文字と音韻の対応意識を高める指導を行ったところ、訓練開始半年時点で受信面はS-S法段階5-1：語順、発信面は2語連鎖まで発達した。音声言語の獲得とともに指さし行動は減少した。本児の音声言語獲得の背景として、軽度の鼻腔共鳴も影響し、発話に音韻の誤りを認めたが表出性音韻辞書は良好であったため文字情報を介することで音韻情報が強化され、音声言語の獲得に寄与したと考えられる。	左被殼出血により全般性注意障害と右半側無視（以下、右USN）を呈した50代男性。X年Y月Z日に受傷した。同日、開頭血種除去術を施行された。Z+22日、当院へ入院となる。入院時から右側を見落としやすいことは認識しており、右USNに対する気づきはある。課題で見落としや見誤りが生じないよう試行錯誤するなど、知的機能も保たれている。しかし、机上課題や日常生活における右側の見落としは残存している。中等度の右片麻痺も呈しているため、ADLは介助を要する。自宅で一人でリモートワークができることを目標とし介入を行っている。目標の達成のためには、まず右USNを改善し日常生活動作を自立することが必要であると考えた。今回は生活場面における見落としを減らすことを目的に、USNのリハビリとして行うことの多い抹消課題と車椅子自走による病棟探索課題を行った。机上課題と日常生活における見落としの関連について文献的考察を加えて報告する。